

棚尾地区まちづくり事業

平成 26 年 8 月 21 日（木）19 時～

棚尾公民館 3 階

第 38 回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

- 1 前回までのテーマに関する参考意見など
水害の記録と排水路、棚尾の農業など

- 2 テーマ 63 「安専寺と安藤圓秀」

- (1) 説明（磯貝国雄）

- (2) 出席者による補足説明、感想など

- 3 連絡事項・情報交換など

- 4 次回日程

第 39 回 9 月 25 日（木曜日）午後 7 時から「達吉の歌碑」

第 40 回 10 月 23 日（木曜日）午後 7 時から「棚尾中学校」

「安専寺と安藤圓秀」

1 要旨

創建は平安時代の長和 5 年（1016）と古く、当初は天台宗であったが応仁 2 年（1468）浄土真宗に改宗した。現住職は第四十四世で、千年も続くお寺である。本年、寺宝である蓮如筆六字名号の軸と梵鐘一口が、碧南市の指定有形文化財に指定された。

又、三代前の住職安藤圓秀は明治、大正時代における棚尾で唯一人の東京帝国大学卒業生で、国文学の教育者として活躍し、一時期母校の助教授などを勤めた秀才である。

2 概要

広報へきなん 第 447 号 昭和 45 年 10 月 1 日号 碧南の文化財から抜粋

棚尾の安専寺は昭和三十八年十月、安専寺同行会長平岩慶一氏を中心とする檀徒一同の熱心な奉仕によって、新しい様式によるすばらしい本堂が再建せられた。この本堂は、碧南市内は勿論近隣の市町においても見られない威容を示している。

安専寺は天台座主慈恵大師（良源）の弟子源徴が長和 5 年（1016）創建し、天台止観寺と号したことが安専寺住世過去帳に見られる。しかしこの源徴については、はたして慈恵大師の弟子であったかどうか、その人物の詳細を知ることはきわめて困難とされている。

安専寺はこのように初め天台宗として創立されたのであるが、応仁 2 年（1468）本願寺の蓮如が三河国土呂に下向した時、二十三世祐性は、蓮如から木像と真筆六字の名号（現存）を賜わり浄土真宗に転じた。開基源徴が天台宗として創建してから四百五十余で浄土真宗となり今日に至ったのである。このことについては、安専寺住世過去帳に「応仁二戊子年二月改円宗帰浄土真宗自信証院殿護本尊弥陀之木像真筆六字尊号等賜」と記載されている。

また当院記録由緒の中に三十六世円敬から本山へ差出した昇進願の書付があるがそれに記載してある。このように天台宗から転宗して今日に至った寺院は安専寺のほかにも多くある。当院記録由緒によると三十三世噲吟（かいぎん）の代に木仏の本尊（現在の本尊）と、寺号が無碍光院（むげこういん）から御免とある。

また住世過去帳には「当代木仏本尊御免初西方寺中山云」とあるので、これによって西方寺との関係を知ることができる。(中山というのは本山と末寺の間にもうけられた寺のことである。)

本堂内には、本尊阿弥陀如来立像(54センチ)、聖徳太子画像、七高僧画像、開基座像、彰如上人画像などがまつてあるが、本堂二階に安置してある阿弥陀如来立像(像高68センチ)は、その作風に平安時代の様式がうかがわれる貴重な仏像である。光背は放射光(光線を表現する筋が中心から放射状につけられているもの)で台座とともに本体とは別に作られたもののように見受けられる。しかしこの仏像の由緒は不明だとのことである。

(文化財専門委員 石川源次郎)

3 安専寺住世系図

開基	源徴	2世	理空	3世	光慶	4世	叡存	5世	信性
6世	普山	7世	智養	8世	公祐	9世	證道	10世	閃意
11世	慶鎮	12世	聞智	13世	誓忍	14世	観山	15世	実智
16世	顕祐	17世	諦空	18世	巖嶺	19世	静海	20世	霊源
21世	皇岸	22世	真成	23世	祐性	24世	実信	25世	宗賢
26世	尊智	27世	興照	28世	観応	29世	是空	30世	善賢
31世	賢門	32世	恵城	33世	噌吟	34世	恵閑	35世	圓説
36世	圓敬	37世	圓諦	38世	圓成	39世	圓順	40世	圓證
41世	圓秀	42世	圓英	43世	圓承	44世	圓智		

4 略年表

西 暦	和 暦	こ と が ら
1016	長和5年	安専寺の創建、天台宗であった
1468	応仁2年	浄土真宗に改宗
1776	安永5年	梵鐘① 太田庄兵衛(四代)
1832	天保3年	喚鐘 七代国松十兵衛光圀
1885	明治18年	安藤圓秀生れる
1942	昭和17年	梵鐘① 戦争で供出

1944	昭和 19 年	学童疎開
1946	昭和 21 年	安藤圓秀が住職につく
1948	昭和 23 年	安藤圓秀逝去
1949	昭和 24 年	梵鐘②を製作 永坂奎兵衛が銘
1963	昭和 38 年	本堂再建
1978	昭和 53 年	埼玉県熊谷市大正寺から、梵鐘①を使用している旨の連絡
1983	昭和 58 年	現在の梵鐘③が寄贈された
1994	平成 6 年	本堂、庫裏の改装
2003	平成 15 年	梵鐘①埼玉県深谷市善法寺へ移る
2011	平成 23 年	梵鐘① 里帰り
2014	平成 26 年	蓮如筆六字名号と梵鐘①が碧南市有形文化財に指定

5 碧南市指定有形文化財

次の二つの宝物が平成 26 年 3 月 28 日付けで、碧南市有形文化財に指定された。

(1) 梵鐘一口 （安専寺には梵鐘が 3 口あるので、これを梵鐘①と名付ける）

ア 文化財の概要 広報へきなん平成 26 年 4 月 1 日号から抜粋

この梵鐘は、安永 5 年（1776）に平坂（現西尾市）の鋳物師太田庄兵衛（四代）正次が製作したものです。

鋳物師・太田庄兵衛家は、寛文 11 年（1671）に近江国栗太郡辻村（現滋賀県栗東市）より平坂に移住し、当地で鍋や釜などの日用品のほかに、寺院の梵鐘の製作を請け負っていました。本品は、戦時中に供出されたにも関わらず、長らく市外の寺院で使用されていましたが、縁あって平成 23 年（2011）に元の安専寺に戻ったという伝来も稀有なものです。

この地域の鋳物産業の発展に寄与した太田庄兵衛家の現在確認できる作品のうち、本品は市内に現存する最古のもので、この地域の鋳物産業の発展を物語る貴重な文化財です。

イ お寺の説明文書

この度、太平洋戦争中の昭和 17 年（1942）に国家に供出したしました安専寺の旧

梵鐘が、69年の歳月を経て平成23年（2011）1月26日に、里帰りをはたしました。
平和の大切さを思います。

この梵鐘は、今から235年前の安永5年（1776）鋳物師太田庄兵衛正次正製作の
素朴で美しい形の梵鐘です。先の大戦で供出し、終戦後たまたま東京深川の埋立地
にあった梵鐘を埼玉県熊谷市大正寺（たいしょうじ）様が払い下げを受けて使って
おられました。昭和53年暮れに連絡があり、無事であることがわかりました。その
後、平成15年に埼玉県深谷市善法寺（ぜんぼうじ）様に移り、この度ご縁がととの
い安専寺に帰ってまいりました。

銘 維峇安永五丙申載晩春十六日
参河國碧海郡志貴莊棚尾邨龍蓬山安専寺常什物
願主現住釋圓説 施主総同行中
同國幡豆郡平坂 冶工太田庄兵衛正次

(2) 墨諸六字名号

室町時代に蓮如が書いた名号で、「南無阿弥陀仏」の六字が書かれています。こ
の六字名号は、蓮如筆の典型的な特徴をよく示し、保存状態もよく、また安専寺
に伝わる古記録で応仁2年（1468）に蓮如から授けられたと伝えられています。
この地方への蓮如の布教の一端をうかがい知ることができる貴重な文化財です。

6 建物

(1) 本堂再建

（本堂再建趣意書）

謹んで有縁御懇志の各位に対し、当寺本堂再建の止む無き状態に至りましたるに
つきご報告申し上げますと共に、御賛助を仰ぎ度く切にお願い申し上げます。

当寺は長和五年二月（九百四十五年前）源徴法師の開基で天台宗止観寺と申しま
したが、応仁二年二十三世祐性法師が蓮如上人三河の国御下向の際、深く帰依し
て郷土真宗に転じ安専寺と改め今日に及びました。

本堂は、建立以来約五百年の長年月を経過した古い建物でありまして、風雨地震
等幾多の天災を凌ぎ、また火災の厄にも遭わずして、よくも今日まで存在したもの
と驚嘆のほかはありません。顧みるに、この本堂でわれわれの祖先代々並びに
多くの信徒の皆さんが信仰の道場として法話を聴聞し、仏果を得られたことと存

じ、因縁の深きことを想い起すのであります。

何分にも古い資材でありますから、腐朽甚だしく、梁柱垂木など天井裏の部分は指で押しても深くへこむほどであります。その上、数年前二回の地震と、伊勢湾台風により大損害を受け、存立の危機を感ずるようになりましたので、檀家一同の検分を経て、幾度かの会合や相談の後、大多数の賛成投票によりいよいよ再建することとなりました。

さて、再建と決まりましたが、如何なる形式によるべきか、度々の委員会や他の寺院の視察など熟議を重ね、時代の趨勢及び将来の利用を考え、鉄筋コンクリート建築にすることに決定した次第であります。

前述の如く決定いたしました、莫大な建築費を要する大事業でありますので、住職並びに檀家一同はここに一大決心をもって広大無辺の仏恩に応え奉り、祖先以来の伝統を受け継ぎ、献身的努力するほかは勿論、大方結縁諸賢の御援助にすぎ、本堂再建の大願成就を遂げたいものと存ずる次第であります。幾重にもよろしくお願い申し上げます。

合掌

昭和三十六年九月

(落慶式)

昭和三十八年十月五日

(2) 本堂、庫裏の改装

平成6年

(3) 鐘楼堂

ア 明治の再建（石積みの名盤による）

願主 安藤円順 寄附人 和讃講中

作人 ○（多又は和）田甚平

明治廿二年己丑春

イ 昭和の再建（名盤による）

親鸞聖人御誕生八百年立教開宗 七百五十年護法要記念事業 鐘楼堂再建

願主 二十一世圓承 施主 総同行

昭和五十三年五月四日

大工棟梁 西尾市羽角町杉浦勉 屋根葺師 西尾市中畑町青山武助

石工事 岡崎市中町 榊原達也

7 その他の宝物など

(1) 梵鐘② (現在、鐘楼下に保管されている。)

梵鐘の銘文 (但し横に読む)

苟有寺焉梵鐘一日不可無吳
衆生起念佛念法念僧之心覺群
仁二年祐正開基爾後四百七十
争興也資材欠乏舉国均供出梵
之募浄財洪鐘立成仰冀一切衆
安樂處應需聊記其顛末云爾

稚所以傳法起信也梵音一響使
迷拔除長夜苦龍蓬山安専寺應
餘年間梵音無断時然大東亜戦
鐘梵音一時為之中絶檀徒深憂
生再聞此妙響音解脱生死海住

昭和二十四年五月

永坂奎兵衛江村撰

服部太郎吉鑄之

願主 第十六世釋圓澄

施主 信徒一同

昭和二十四年五月

(意識) 若院

- ① お寺にとって梵鐘というものは、仏さまの教えを伝えるために、なくてはならない大切なものであります。梵鐘の音の響きは、全ての人々に仏さまの教えを敬う心をよび起こし、人々の迷いや苦しみを取り除いてくれます。※グケン：大きな鳴り物
- ② ここ龍蓬山安専寺は、応仁二年（1468）に祐性さんが開いたお念仏の道場です。それから四百七十年あまり、梵鐘の音が途絶えることは一度もありませんでした。
- ③ しかし、大東亜戦争（第二次世界大戦）が始まり、金属資源が不足してきたので、どこのお寺もみな梵鐘を供出しなくてはならなくなりました。このため一時、梵鐘の音が鳴り響くことがなくなっていました。
- ④ 戦争が終り、梵鐘のないことを心配した門徒さんたちが、浄財を出し合って、この梵鐘を造ることができました。
- ⑤ このうえは、全ての人々が、再び、この心和む梵鐘の音の響きを聞いて、迷いや苦しみをはなれ、ほんとうに安らかな気持ちで、平和に暮らしていくことを願ってやみません。ことの次第をわずかばかりですが、記しておきます。

(2) 現在、使われている梵鐘③

南無阿弥陀仏

碧南市棚尾町龍蓬山安専寺

昭和五十八年十一月

願主 釋圓承

滋賀県愛知郡湖東町 鑄匠黄地佐平 謹鑄

施主 杉浦国夫

(3) 喚鐘

七代國松十兵衛光圀（光邦）作 天保三年（1832）三月

口径 34,8cm 総高 53.5cm

（銘）

三州碧海郡志貴庄棚尾村龍蓬山安専寺 願主現住圓敬

天保三壬辰年三月下旬 寄進当院和讃講中

同州同郡國松十兵衛尉 藤原光圀

8 行事など

(1) 寺子屋開設

文久元年（1861）～明治5年（1872）

男 124 人 僧安藤円順 習字

(2) 明治時代の法会の様子

法会に付き俄台飾り奉納願

碧海郡棚尾村

本月三十及び三十一日に当村安専寺に於いて和讃講法会に付き境内にて有志は別紙目録の通り俄台飾り奉納仕度り候間御許可成下度く此段奉願候也

明治二十二年五月三十日

右信徒総代 斎藤安右エ門 井上弥七 斎藤徳右エ門

安専寺住職 安藤円順

愛知県知立警察署長大浜分署御中

俄台飾物図録	一	一の谷須磨ノ浦の場
	一	頻婆娑羅王仙人殺ノ場
	一	韋提希夫人獄ノ場

- 一 五悪陰ノ場
- 一 釈迦如来ノ尊像

(3) 公益事業

昭和 17 年の棚尾町公益事業報告（他の二寺と同様の内容、以下は安専寺分）

- ア 託児所 6 月下旬～7 月上旬 10 日間、11 月下旬 7 日間
被益者 180 人 方面委員
- イ 共同炊事並びに隣保事業 6 月下旬～7 月上旬 7 日間、11 月下旬 5 日間
被益者 135 人 農事実行組合
- ウ 敬老会 被益者 153 人

(4) 学童疎開

昭和 19 年 6 月、アメリカ軍による本土空襲の激化に伴ない、都会地学童の集団疎開が促進せられた。棚尾の安専寺へも名古屋の堀田小学校 5 年生が疎開して来た。児童数 58 名。昭和 20 年 10 月 26 日 6 年生で名古屋へ帰った。帰りの土産に草履を贈った。三河地震の際、お寺の壁の棚に載せてあった鉄製の砲弾が落下したが、幸い、その下で寝ていた児童に怪我がなく、肝を冷やした思いであったと住職が述べられている。

(5) 早起き会

昭和 52 年から 38 年間も続いている子供中心の行事。本年も 7 月 21 日から 28 日の日程で、朝 6 時 30 分から 7 時 20 分まで開かれ、ラジオ体操の後、お勤めの稽古をし、ゲームを楽しんだ。

9 安藤圓秀

三代前住職の安藤圓秀は学問に秀でた方であった。明治、大正時代における棚尾で唯一人の東京帝国大学卒業生で、国文学の教育者として活躍し、一時期母校の助教授などを勤めた。

(1) 経歴

明治 18 年（1885）安専寺住職安麻呂の長男として生れる。

明治 43 年（1910）東京帝国大学文学科卒業

明治 44 年（1911）宮崎県立延岡中学校教諭となる

大正 8 年（1919）松本高等学校教授となる

大正 11 年（1922）第二高等学校教授になる

大正 14 年 (1925) 東京帝国大学助教授となる
昭和 4 年 (1929) 東京帝国大学助教授依願免官
昭和 5 年 (1930) 国学院大学講師となる
昭和 18 年 (1943) 勲四等瑞宝章を授与される
昭和 21 年 (1946) 「農学事始め」を出版
昭和 23 年 (1948) 63 歳で死去。

(2) 本堂再建記念誌 発行昭和 43 年 10 月から抜粋

林口孝 著

「碧南第一の学者は誰か？」と問われたら、異口同音に「安藤圓秀」と答えるだろう。師は明治十八年三月五日この安専寺の長男として生まれ、昭和二十三年八月二十六日惜しくも六十四歳で逝去された。

幼にして俊敏、神童以上の神童として、村民に期待と畏敬せられた。県立二中（岡崎高校）第四高等学校（金沢大学）を卒えて、東京帝国大学の支那文学科を卒業された。時に明治四十三年七月のことであつた。卒業後、松本高等学校、第二高等学校（東北大学）の教授を歴任して、東京帝国大学の助教授に栄転された。在任中、東大総長の信望篤く、学生監や学生課長も歴任された。退官後、国学院大学、智山大学、日本大学、府立高校等に教鞭を執られ、さらに聖心女子学院、興南練成院主事、学徒援護会理事、学徒図書組合理事長の要職にも就かれた。師の著書の主なるものは、次のとおりである。

農学事始め（昭和 21. 1. 1 発行）

諸経随筆（昭和 23. 9 発行）

諸経に関する考察の一、二（服部先生古希祝賀記念論文集）

梁武雜記（智山学報）

崇高なる悲劇（新文会主催聖堂に於ける講演）

孟子の王道と支那の文化工作（国学院大学漢文学会会報）

鐔についての随筆（邦人第二巻第七号、昭和 11. 7）

孔子に関する論文（修養全集、講談社発行第一巻）

孔子とその徒（戦前の中学教科書に所載）

師は研学の寸暇に、文芸や書をものせられた。その内の一、二をかかげる。

椿咲くこの家守りあれと母言えど 水の人

鳴き細る蟬日の色の秋の見ゆ 水の人

花 (キング、昭和6年5月号掲載)

花が咲いた。

名も知らぬささやかな野草にも

其の花を見よ。

そして一糸も乱れぬ大自然の正しき理法を看取せよ。

其処に永遠の真理が輝き、無限の生命が躍動するのではないか。

此処に詩があり、絵があり、あらゆる宗教と芸術がひそんでいる。

師は書もよくせられた。その書風は気品が高く円満なお人柄がよく現れている。学者の常として、俗世界、殊に政治界には冷淡で無関心の人が多いのに、師はそうではなかった。その一例として四カ町村学校組合立の碧南商業学校（碧南高校）の県営移管の難問題に際しては、師の大学同窓生であつた時の愛知県知事三辺長治氏の尽力を求めて成功せしめた。又、戦後の碧南干拓の完成には、当時の農林次官で、これ又、師の大学同窓生であつた河合良成氏の援助が大であつた。

その他、中山神明社の昇格も師の在京の教え子によるところが多大であつた。この他、公私共に郷土を裨益されたことは枚挙に遑がない。師の人情味豊かな一面を物語ろう。石川源次郎氏は東京の学校卒業後、師の推輓によって長野県の名門校に就職が出来た。小澤きみゑ女史は医専の四年生の時、東京大学の大学院の見学を希望して、すげなく拒絶されたが、師によって東大学生課長の紹介状を得て、見学を許可され、医学研究上に大なる裨益を得られたという。その他、当時の棚尾の知識人の大半が、師のお世話になったといわれていた。

師はとにかくご健康の勝れなかつたご令室に、常に暖かい思いやりをかけておられた様子は、見る目にも美しく涙ぐましいものがあつたという。又、師のご家庭の食卓には、主客は勿論、下男、下女まで同一の食べ物で、和気あいあいと歓談されたと聞くも微笑ましい限りである。読書や研究にお疲れになると、囲碁をお楽しみになった。技量も三段以上かと洩れ聞いている。

仏前のお経は、きわめて一字一句を嚙締めてお読みになつたので、早口に読むに慣れたお役僧は閉口したとの笑い話もあるそうだ。「学問は六十歳までに一応纏めて、それから執筆すべきだ。」とよく口にせられたと言う。先生の学殖の博く深いのに比して御著書の比較的少なく拝せられるのも、そのせいかも知れない。学徳いよいよ熟して、昭和二十一年八月一日、安専寺第四十一世住職に襲職せられたが、惜しくも二ヵ年後には遷化された。悲しい極みである。

(3) へきなんのひとと自然 碧南少年のむかしむかし探訪記「ひとと自然」人物篇

発行：昭和 63 年 4 月 碧南市役所 から安藤圓秀を抜粋する。

「教育家になったが、毎年、郷里へ帰るのが楽しみだったよ。やはり、住職のせがれだからな。」

「安専寺住職の長男だそうですね。」

「そうだよ。寺の子として生れても、教育界で活躍させてもらったんだよ。」

「学生時代は何を勉強していたんですか。」

「中国文学だよ。服部宇之吉博士に指導してもらったこともある。わたしは、特に「詩経」の研究に力を入れていた。」

「最初、中学の先生になったんですか。」

「そうだ。延岡中学だったよ。それから、富田林中学校や愛知第一中学校も歴任させてもらって幸せものだったよ。」

「次には、高等学校の先生にもなさったでしょ。」

「松本高等学校の教授をしていたよ。」

「すばらしいわ。」

「大学の教授にまでなられたんですね。」

「まあねえ。東京帝国大学の助教授になれて、こんな嬉しいことはなかった。」

「郷土の誇りです。」

「総長の古在曲直博士には大変かわいがっていただいてな。退官してからも、ずっと信頼していただいた。有りがたいことだ。」

「先生の発表された著書を教えてほしいな。」

「そうだな。わたしは、農学部の沿革を調べておったんだよ。その一部を「農学事始め」と題して出版することができて嬉しかったな。」

「他にもあるでしょ。」

「『深武雑記（智山学報）』『孟子の王道と支那の文化工作（国学院大学漢文学会報）』や、『禅に関する随筆』『孔子』『孔子とその徒』などで、わたしの著書は少ないほうだよ。」

「賞も受けたんでしょ。」

「興南練成院主事や研究部長になったりして、正五位勲四等瑞宝章をもらったよ。あの時は感激したなあ。」

「終戦後も活躍されますね。」

「学徒援護会理事などをやらせてもらってな。書も好きでしているんだ。」

「安専寺の檀家もよく回っておられてんですね。毎年、夏冬の休暇には法要のため帰郷されて。」

「郷里では、みんなが訪ねてくれて楽しく過ごさせてもらってるよ。」

(4) 斎藤宇三郎氏の石碑

妙福寺の常夜灯北に建てられている斎藤宇三郎氏の石碑の裏面には、文學士安藤圓秀書と刻されている。

(5) お聞きした話

面倒見の良い方で、当時東京へ勉強に行った人の半分くらいは圓秀さんの世話になったと聞いている。

(6) 杉浦吉松氏の土風呂

杉浦吉松氏が裏千家から土風呂製作の職方として認定された時、仲介の労をとられたのは、圓秀の妹原田ふみさんである。(テーマ 41 参照)

(7) 俳句

俳句も嗜まれ「白水」と号された。

(8) 棚尾の秀才

ア 達吉の随筆

俳誌「アヲミ」の大正 12 年 10 月号に藤井達吉が「ひとりごと」と称し、当時の高等教育卒業生の状況を次のように述べている。「学制頒布五十年記念碧海郡人物略歴を贈られ、見て真に感じた。此五十年間に中等以上卒業生累年統計表といふのを、五十年間に帝大一、私立大一、高等一、医専一、外一の五名……以下略」

イ 棚尾地区東大卒業生

圓秀の後、現在までの棚尾地区東大卒業生は次のとおりである。(敬称略)

吉田 隆夫 (汐田町)

小笠原 靖 (志貴町)

永井 修 (志貴町)

永井 猛 (志貴町)

杉浦 邦晃 (志貴崎町)

小笠原義之 (志貴町)